

文化遺産観光と農村空間の商品化

Consuming rural places and heritage tourism

松井 圭介^{1*}

Keisuke Matsui^{1*}

¹筑波大学大学院生命環境科学研究科

¹Univ. of Tsukuba

日本では「世界遺産ブーム」とも呼ぶべき現象が、近年とみに顕著になっている。世界遺産への登録が地域経済にもたらす経済効果への期待は大きく、観光振興による地域活性化の切り札と見る向きもある。世界遺産への登録は、日本の貴重な文化財の価値が国際的に評価されることを意味するとともに、登録を目指す過程で地域における総合的な文化財保護の取り組みが格段に充実するという点で意義をもつが、このような「世界遺産ブーム」の背景には、観光需要の掘り起こしを期待する地域の側だけでなく、観光者側のニーズにもみられる。団塊世代の離職期を迎えて、余暇・観光需要のさらなる高まりに加え、こうした世代は比較的経済的にゆとりがあるうえ、歴史や文化への関心が強く、学習型・教養型観光への志向がある。世界遺産は国内外の時間的・経済的なゆとりをもつ人々にとって、非常に魅力的な観光対象であり、需要と供給のバランスがとれた世界遺産観光は今度さらに市場を拡大していくものと考えられる。一方で、世界遺産登録によって地域が受けるマイナス的な要素も数多くの指摘がなされてきた。観光客による文化財の破損・汚損といった直接的な被害にとどまらず、過剰な観光客の受け入れによる地域住民の生活環境の悪化や所得格差の拡大、観光地化による自然環境や景観の破壊、およびそれに伴う世界遺産としての価値の喪失などがその例である。加えて、世界遺産登録が持続的な地域発展に結びつくのかに関して疑問が呈せられている。世界遺産への登録は一時的な観光客の増加はもたらすものの、直ちに急増するものではなく、むしろ一時的な観光ブームに終わりがねない危険性も指摘されている。世界遺産登録をめぐるのは、世界遺産委員会の意向に左右される面も大きい。1994年に採択されたグローバルストラテジーにより、世界遺産に関する地域別・種別不均衡の是正を図り、遺産の代表性・信頼性を確保することが求められている。これまで偏重されてきた「ヨーロッパ」、「都市」、「宗教」、「建造物」に対して、ともすれば捨象されがちであった世界諸地域の文化・伝統、民族的な風景に価値を見だし、人間と土地との関わり方を重視する傾向が生じてきた。そこで新たな世界遺産の対象とされたのが、例えばコルディリェーラの棚田群（フィリピン）や五箇山・白川郷の合掌造り集落の景観であり、1995年以降、人類と環境との相互作用の表出としての文化景観に世界遺産としての価値を見出さそうとする動きが活発になった。このように世界遺産をとりまくポリティクスの変化の中で、農村空間における文化景観の保全と活用が重要な課題となっている。そこで本発表では、世界文化遺産の暫定リスト入りに決まった「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」における世界遺産運動を事例にして、農村におけるローカルな信仰関連遺産およびそれらを包含する農村の文化景観が文化遺産としてのまなざしを受けることの意義と課題を明らかにする。教会群が分布する長崎県の五島列島などでは、少子高齢化による過疎化が進行し、信徒たちの力だけでは教会堂の維持が困難な状況にある。長年の風雨に耐えてきた教会建造物にも破損が目立ち、倒壊の危機にさらされる施設もみられる。観光客を受け入れることによって、国や地方自治体からの財政上の支援を受け、教会堂をはじめとする貴重な宗教施設が文化財として保護されることに期待する教会関係者も多い。一方で信徒個人のレベルでは、自分たちの場所（教会）が観光資源化されることに対する不安の声も聞かれる。信仰の場が観光客に荒らされはしないか。先祖から大切に受け継いできた信仰が見世物にさ

れるのではないか。こうした不安にあるように、教会群を観光資源化しようとする動きが強くなれば、教会堂の本来の意味である祈りの場としての宗教空間が変容する危険性を孕んでいることは否めない。長崎のカトリック教会は小教区となる集落を単位とした信者の共同体に担われた聖なる空間であり、他地区との教会とは相互に教会堂建築が観光資源として注目され、あたかも秩序をもった意味ある巡礼地として、複数の教会や殉教地が結び付けられている。社会が急速にグローバル化するなかで、時空間の画一化・均質化・平準化が不可逆的に進行するにともない、反対に个性的で唯一無二の場所として、聖地は再び脚光を浴びるようになった。聖地は古来、社会経済的、政治的、文化的、あるいは宗教的といったさまざまな目的をもった人々の思惑によって、創造され、新しい意味を付与されるとともに、絶えず葛藤が繰り返されてきた。聖地創造の時代は、現代人による「場所の探究」行為といえるが、同時に聖地もまた大量生産されることにより、画一化し、人々に消尽される面も注視する必要がある。

キーワード:場所の消費,ルーラリティ,長崎の教会群,世界遺産,遺産観光,巡礼

Keywords: Consuming places, rurality, Nagasaki Church Group, World Heritage, heritage tourism, pilgrimage